

[037] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10233>

出版情報：語文研究. 37, 1974-08-31. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



故 福田良輔先生遺影

故
福
田
良
輔
博
士
追
悼
号

献 辞

福田良輔先生みまかり給ひて、早くも半歳あまりの月日は流れぬ。こぞの国語国文学総会の折、久かたぶりの御臨席を得て、激励のことばなど賜はり、一同その恙なき御帰福と再会を喜びて、盃をあげしことも、思へば昨日のごとし。然るにはからざりき、その時、病魔すでに先生の身に迫れりとは。

夏の末つ方より、御不調日にけに増さり、九州大学付属病院放射線科に入院せられてより、秋のたくるままに、もはら療養につとめられしも、つひにその効なく、師走朔日の暮靄と共に、天の召さるるところとなり給ひき。

先生かねてより、この日のことを予知せられたるにや、御近親をはじめ、予のごとき者をも、その枕辺に呼ばせられ、後のことなど、しかとのたまひ置き、従容として、今はのきはに臨み給ひしなり。げに、うつそみの人の世は、空しくはかなきものとのみ思ひ知れど、そを処して、学問一途に貫き給ひし御生涯の、尊くもまた偉なるかな。

先生在世の頃、宴席などにて、楽しみ余れば、しばしば「五木の子守唄」とて、方言まじりの民謡ひねり出だし、歌ひ給ひしく、

おどんが うっちんちゅうて

だいが 泣いちくりゅうか

裏の松山 蟬が鳴く

と。そのみ声のわかわかしく、また御そぶりの稚氣に溢れたるに、満座ひとたびは、興に入ること限りなかりしかど、ふ

とその歌詞の虚無慘澹たるに思ひ到りて、頭を垂れし者、独り予のみにはあらざりけらし。然るに先生逝かせ給ひて、薤の折、会衆一同の泣血哀慟して、おくところを知らざりしは、まこと悲しき中に、羨としくもあるかとさへおぼえて、さらに感慨新たなりき。

世俗、去る者は日々に疎しとかいへど、しかも追慕の念止みがたき者、ここに集ひて、おのおの論考を寄せ、これを語文研究の一巻となし、謹み礼まひて、御霊の前に献げむとす。冀はくは、先生、幸ひに予等が微衷を諒とせられ、遙かに天翔り来って、親しくみそなはさむことを。

昭和四十九年七月一日

代表 春日 和 男

故 福田良輔博士 略歴

明治三十七年四月二十八日 福岡県久留米市諏訪野町二二三八番地に生まれる。

大正十一年三月 福岡県立中学明善校卒業。

大正十五年三月 弘前高等学校文科甲類卒業。

昭和四年三月 京都帝国大学文学部国文学科卒業。

昭和四年四月 台北帝国大学助手に任ぜられ、文政学部国語学国文学第一講座勤務を命ぜられる。

昭和十五年十月 台北帝国大学助教授に任ぜられ、文政学部国語学国文学第一講座勤務を命ぜられる。

昭和十八年二月 台北帝国大学教授に任ぜられ、文政学部国語学国文学第一講座担任を命ぜられる。

昭和二十一年一月 昭和二十一年勅令第二八七号に依り退官。

昭和二十一年六月 九州帝国大学法文学部における国語学の講義を囑託せられる。

昭和二十三年四月 九州大学講師に任ぜられる。

昭和二十三年六月 九州大学助教授に任ぜられ、法文学部国文学講座勤務を命ぜられる。

昭和二十五年七月 九州大学教授に任ぜられ、文学部国文学講座担任を命ぜられる。

昭和二十八年四月 九州大学教授(文学部)に配置換えせられる(新制)。

大学院文学研究科指導教官を命ぜられる。

九州大学教授(文学部)に併任せられる(旧制)。

文学部国語学国文学第一講座担任を命ぜられる(新制)。

京都大学より文学博士の学位を授与せられる。

昭和三十三年三月 停年により九州大学を退官する。

昭和三十七年三月

昭和四十三年三月

昭和四十三年四月 青山学院大学文学部教授の職に就く。

昭和四十三年四月 九州大学名誉教授の称号を授与せられる。

昭和四十八年四月 九州産業大学教授の職に就く。

昭和四十八年十二月(一日) 消化器系癌疾患のため、九州大学付属病院放射線科にて逝去(享年六十九才)。

正四位勲三等旭日中綬章を贈られる。

昭和四十八年十二月(七日) バプテリスト福岡東教会において告別式。

故 福田良輔博士研究著作目録

- 大伴家持の修辭研究
- 勢語中の疑問の歌三首
- 業平伝説化序説
- 万葉集卷四後人追加同歌作者考
—付卷三国歌大観番号四一一和歌者考—
- 万葉作者「今城王」考
- 源氏物語帚木卷冒頭の「さるは」に就いて
- 長沢伴雄の枕草子研究と一異本
書紀に見えてゐる「之」字について
- 万葉集の「之」字の訓について
- 二つの古事記頭書
- 伊勢物語の民謡性
- 王朝文化と伊勢物語
- 青年時代の長沢伴雄
- 神田本伊勢物語愚見抄に就いて
明治初期の国字問題について
—維新前後より明治十年まで—
- 文脈中に於ける指示する語の語性転移について
—それはをめぐりて—
- 万葉集用字法の借訓の用字意識について(上)
- 万葉集用字法の借訓の用字意識について(下)

国語国文の研究二十二号	昭和三年七月
言語と文学一輯	昭和五年一月
言語と文学四輯	昭和五年十二月
言語と文学六輯	昭和六年六月
国語国文二卷十号	昭和七年十月
国語国文三卷六号	昭和八年六月
愛書 第二一輯	昭和九年七月
台北帝国大学文政学部 文学科研究年報第一輯	昭和九年九月
京都帝国大学国文学会二十五周年 記念論文集 星野書店	昭和九年十一月
文学 三卷 四号	昭和十年四月
国語国文六卷一号	昭和十一年一月
台北文学一卷六号	昭和十一年十二月
愛書 第八輯	昭和十二年一月
愛書 第九輯	昭和十二年五月
国語国文七卷十二号	昭和十二年十二月
台大文学三卷三号	昭和十三年一月
原生林	昭和十三年六月
原生林	昭和十三年九月

法隆寺釈迦仏造記中に見えたる「鬼前大后」管見

上代に於ける「所」字の特殊の用法について

古今集和歌の排列基準としての美意識

台湾国語問題覚え書

古事記表記の不統一について

古事記の「為」字

奈良朝時代東国方言の成立について(上)

奈良朝時代東国方言の成立について(中)

奈良朝時代東国方言の成立について(下)

略解 伊勢物語

奈良朝時代東国方言に関する諸問題

— 亀井孝氏・金田一博士の批判に答えつゝ —

国語の研究史 安藤正次編『国語の概説』

東人と万葉集の東歌 万葉集講座 第四卷

仮名字母より見たる万葉集巻十四の成立過程について

文の陳述性について

古事記の純漢文的構文の文章について

筑前国志賀白水郎歌十首の作者の複数性について

A Study of the formation of the Eastern dialect in the Nara Era with special reference to its phonetic phenomena ;
STUDIES IN LITERATURE No. 2.

古代語法存疑—エ列音の連体形—

古代語法存疑—久語法について—

巻十四万葉集訓詁 万葉集大成四 訓詁篇

東歌の語法 万葉集大成 六 言語篇

台大文学四卷四号

安藤教授還暦祝賀記念論文集

台 湾(歌 誌)

台大文学六卷三号

台大文学七卷五号

国語国文十六卷三号

文学研究三十七輯

文学研究三十八輯

文学研究四十輯

永 田 書 店

文学研究四十二輯

明 治 書 院

創 元 社

万 葉 五 号

国語国文二十一卷九号

文学研究四十四輯

文学研究四十六輯

(九州大学文学部紀要二卷)

文学研究四十八輯

文学研究五十輯

平 凡 社

平 凡 社

昭和十四年 九月

昭和十五年 二月

昭和十五年 六月

昭和十六年 七月

昭和十八年 三月

昭和二十二年 四月

昭和二十三年 十二月

昭和二十四年 十二月

昭和二十五年 十一月

昭和二十五年 七月

昭和二十六年 十一月

昭和二十七年 四月

昭和二十七年 九月

昭和二十七年 十月

昭和二十七年 十月

昭和二十七年 十一月

昭和二十七年 十一月

昭和二十八年 八月

昭和二十九年 二月

昭和二十九年 三月

昭和二十九年 十二月

昭和三十年 二月

昭和三十年 五月

古代日本語の成立過程

— 弥生式文化を土台とする社会変革との連関において —

倭建の命は天皇か—古事記の用字法に即して—

奈良時代東国方言とその基層語

奈良時代東国方言の周辺

— 言語基層・八丈島方言・補説 —

志賀白水郎歌十首の歌謠性

— 憶良の単独創作説を疑ふ —

奈良時代東国方言の音韻状態(一)

東歌・防人歌の語法存疑

— 「降らる」「干さる」等の「る」について —

原始日本語の文法 日本文法講座 3

東歌所出の人麿歌集の歌をめぐって

古代日本語に現はれてゐる動詞型連用形の特異形について

国語学にはどんな領域があるか

陳述の機能 続日本文法講座 1

古代日本語における接尾辞「り」について

「ソダタキ・タタキ」管見

「古事記」のシについて

万葉集の解釈と文法上の問題点 講座解釈と文法 2

古代日本語における複語尾の四段活「る」の一考察

上代語—語源研究の基礎の上に—

中央語系日本語における音節結合—有坂法則について—

九州方言概説 方言学講座 四

万葉集の枕詞「霞零」「丸雪降」はアラレフリかアラレフルか

国語学 二十一輯

昭和三十年 六月

語文研究 三号

昭和三十年 十月

国語国文二十四卷十一号

昭和三十年 十一月

文学研究五十三輯

昭和三十年 十二月

語文研究四・五合併号

昭和三十一年 十月

文学研究五十六輯

昭和三十一年 七月

神田博士還暦記念書誌学論集

昭和三十一年 十一月

明治書院

昭和三十一年 十二月

文学 語学 七号

昭和三十三年 三月

文学研究五十七輯

昭和三十三年 三月

解釈と鑑賞二十三卷五号

昭和三十三年 五月

明治書院

昭和三十三年 五月

国語国文二十七卷十一号

昭和三十三年 十一月

文芸と思想十八号

昭和三十三年 十一月

万葉三十四号

昭和三十五年 一月

明治書院

昭和三十五年 二月

文学研究五十九輯

昭和三十五年 三月

文学 語学 十七号

昭和三十五年 九月

文学研究六十輯

昭和三十六年 三月

東京堂

昭和三十六年 六月

語文研究十三号

昭和三十六年 十月

- 古代日本語の方言圏
 上村孝二氏に答え再考を促す
 表記法から見た万葉集卷十四の成立について
 天平十年駿河国正税帳の防人数と東国方言
 古代語文ノート
 古代日本語における語構成と音節結合について
 上代における古代日本語の状態
 ー日本における方言発生と奈良時代東国方言を中心にー
 助動詞の機能ー接尾語・複語尾・付属語形式ー
 奈良時代東国方言の研究
 古事記のホの仮名について
 東国語
 九州の万葉 共著
 ア列音の活用機能とク語法
 上代の国語『講座日本文学』1 上代編I
 古事記の多元性についてー甲乙ホ音の存否をめぐるー
 方言と古文書
 古代日本語と方言との成立に関する若干の卑見
 東国方言
 助動詞「む」の仲間
 「そダタキ・タタキマナガリ」考
 東国方言の国語史的意義
 日本語の伝統 講座 正しい日本語I 総論編

- 解釈と鑑賞二十七卷二号
 国語学五十一輯
 文学研究六十一輯
 語文研究十六号
 桜 風 社
 国語と国文学四十一卷三号
 文学語学三十一号
 口語文法講座 2
 各論研究 明治書院
 風 間 書 房
 九州大学文学部「創立
 四十周年記念論文集」
 解釈と鑑賞三十一卷五号
 桜 楓 社
 文学研究六十五輯
 三 省 堂
 青山学院大学文学部紀要十二号
 解釈と鑑賞三十四卷八号
 国語と国文学四十七卷十一号
 文法 三卷 一号
 文法 三卷 八号
 青山 語文 二号
 大東急記念文庫文化講座講演録
 「万葉集II」
 明 治 書 院
 昭和三十七年 二月
 昭和三十七年 十一月
 昭和三十八年 三月
 昭和三十八年 六月
 昭和三十九年 二月
 昭和三十九年 三月
 昭和三十九年 三月
 昭和四十年 四月
 昭和四十年 六月
 昭和四十一年 一月
 昭和四十一年 五月
 昭和四十二年 六月
 昭和四十三年 三月
 昭和四十三年 三月
 昭和四十三年 十一月
 昭和四十四年 三月
 昭和四十四年 七月
 昭和四十五年 十一月
 昭和四十五年 十一月
 昭和四十六年 六月
 昭和四十六年 十二月
 昭和四十七年 五月
 昭和四十七年 六月